

神様、罪人のわたしを憐れんでください

ルカによる福音書 18 : 9 - 14



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第 20 主日

2025 年 10 月 26 日

京都聖三一教会にて

ルカによる福音書を読んでいると、祈っておられるイエスの姿に何度か出会います。イエスはひとり祈り、弟子たちとともに祈り、大勢の人たちと一緒に祈られました。

また弟子の一人の求めに答えて、「祈るときには、こう言いなさい」と言って「主の祈り」を教えてくださいました（ルカ 11:2）。それでわたしたちはこの礼拝でも、またひとりのときも、イエスが教えてくださった「主の祈り」を祈るのです。

イエスにとって、祈りは神様との真心からの交わりでした。祈りをとおしての神様との交流が、イエスの命でした。祈りにおいてイエスの思い、大小の重荷を抱えての訴えは神に届き、また神様の思いと神様の力は祈りのうちにイエスに注ぎ込まれました。

今日と一緒に唱えた詩編 84 編もまた、イエスのうちに蓄えられていて、この詩編の言葉がイエスご自身の祈りとして神に届いていたはずです。わたしたちが詩編を唱えるとき、イエスが一緒に祈っていてくださいます。

そのイエスにとって、とても苦痛になる祈りがありました。ある人々が神殿で唱える心のない祈り、大通りで人に聞かせようとするかのような大声の祈り。それはイエスの魂を深く傷つけ苦しめました。それは祈りのようであって祈りではない。それならむしろ沈黙しているほうがよい。

そのようにイエスが苦痛に感じる祈りをしていたのはだれか
というと、ファリサイ派です。ファリサイ派。当時、人々の間
で非常に大きな影響力を持っていた熱心な信徒グループです。
ファリサイ派の中には多くの律法学者、つまり聖書学者がいま
した。聖書に非常に詳しいし、その教え、掟を熱心に実行する。
祈りも献金も熱心にする。模範的と見なされた人々です。その
ファリサイ派の人々の祈りが、イエスには耐えられないほど苦
痛でした。もちろん、大勢のファリサイ派の中には、そうでは
ない、真心からの祈りをする人々もいたに違いありません。け
れども強い影響力を持ち、一般の人々から恐れられているほど
のファリサイ派の祈りの多くは、イエスが願われないものだっ
た。そこにはうぬぼれがあり傲慢があり、自己宣伝があって、
真心がないからです。

ファリサイ派は力を持っています。人々の多くは、ファリサイ
派の祈りが祈りだと思ってしまう。それでイエスはどうして
も、今日の話をしなければならなかったのです。ファリサイ派
の人の祈りと徴税人の祈りのたとえです。

「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派
の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立つ
て、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人た
ちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、
また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わ

たしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』」

ルカによる福音書 18:10-12

ファリサイ派の人は「心の中でこのように祈った」と訳されているのですが、これは自分の心が、自分の関心が自分のほうに向いているということです。つまり、自分がどれほど立派で信仰熱心であるか、どれほど正しく生きているか、という自分を誇りたい。韓国の聖公会で用いている『共同翻訳』という聖書があるのですが、それを見てみたらこう訳してありました。

「^{ボラヌン} ^{ドウシ} ^{뜻이} (見ろというように)」。神様、この立派なわたしを見てください。神様の前に自分の立派な信仰、立派な行いを積み上げている。しかも自分のようではない他の人々に対する軽蔑がある。これが真心からの祈りと言えるでしょうか。

もうひとりは徴税人です。人々から税金を取り立てる。それだけでも嫌われるのに、おそらくはその税金は異国の支配者ローマ帝国に納めることになるのです。民族の裏切り者です。しかも徴税人の中には、取り立てた税金の一部を自分の懐に入れる者がかなりいたようですから、一般に徴税人は嫌われ軽蔑されていた。そのような徴税人の一人が、今、神殿に来て祈っています。

「ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』」 18:13

祈りたい気持ちはあるのです。ほんとうに祈りたいのです。けれども自分には神に近づく資格がないと感じています。「遠くに立って、目を天に上げようともせず」。神様に顔向けできないのが自分だということです。

「胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』」

「憐れんでください」。自分には何も誇るものはない。それどころか自分はゼロであり、むしろマイナスの人間です。神様は自分のことを怒っておられるに違いない。神様、怒りをしずめてください。顔を和らげてください。憐れんでください。あなたの憐れみにすぎるしかありません。

イエスはここで「たとえ」として語っておられるのですが、実際にそういう人と出会った。その人の祈りに心を動かされたことがあったに違いありません。自分の愚かさ、自分の過ちを抱えて苦しみつつどうすることもできず、目を天に上げることもできずに、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と心で嘆き訴えるしかなかった徴税人。その人の祈りを心に感じて、イエスのうちに悲しみと愛と憐れみが湧き起こった。これ以上の祈りがあるだろうか。

「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」 18:14

「言っておくが」という訳し方はやめてほしい。「あなたがたに言うが」と普通に訳したい。それはともかくとして、イエスは言われます。

「義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」

「義とされた」。つまり神様が大きくうなずき肯定してくださった。神がこの人の祈りを聞いて心を動かされて、手を伸ばして涙を流すほどに「愛するわが子」と呼びかけられた。それがイエスには聞こえるのです。

神様はわたしたちの祈りを評価したり採点されたりするではありません。ただ真心からの祈りを喜んで受け容れられる。

「神様、罪人のわたしを憐れんでください」という心の叫びに、神の憐れみが溢れ出すのです。

わたしたちは人として過ちを犯します。怠慢であったり、失敗したり、人を傷つけたり、大事なことから逃げたりする。あるいは重い病に苦しむことがある。その自分をどうすることもできないことがあります。けれどもそのようなときに、あの徴税人の祈りがわたしの祈りになります。

「神様、罪人のわたしを憐れんでください」

憐れみを求めるわたしたちの求めに対して、神様は無感覚ではありません。神の憐れみがわたしたちに向かって湧き起こり、

わたしたちの中に注がれ、そして神の憐れみがわたしたちを内側から動かし始めるのです。

お祈りします。

神様、わたしたちを真心から祈る者にしてください。わたしたちを憐れんでください。わたしたちがあなたの憐れみを求めて祈るとき、あなたの憐れみがわたしたちに注がれて、その憐れみがわたしたちを動かすようにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン